

ナーランダ大学の復興計画

ゴーパ・サバロワール

※ナーランダ大学は、紀元5世紀ごろに建てられ、12世紀末ごろ、イスラーム勢力のインド征服によって破壊されるまで、仏教研学を中心とする知の一大拠点であった。ブッダガヤの北東にあり、現在はビハール州に属する。釈尊時代のマガダ国の首都ラージャグリハ（王舎城）の近郊に位置し、釈尊自らもこの地を訪れたという。大学の最盛期には諸国から1万人以上の学生、2千人に及ぶ教師が集い、蔵書9百万巻を誇ったともいう（数値には諸説ある）。この大学を国際大学として復興するプロジェクトをインド政府が提案し、日本を含む各国が支持を表明している。

はじめに、このような素晴らしい場で「世界平和の

ためのニュー・ヒューマニズム」に関するセミナーに参加することができ、大変にうれしく、また光栄に存じます。

「ニュー・ヒューマニズム」という言葉にこめられた世界観や哲学は、一つの簡潔な言葉に要約できるかもしれませんが、実は、説明に多くの紙幅を要する、はるかに深遠な哲学を内包しています。私は、「ニュー・ヒューマニズム」の専門家というわけでも、少しでもその道を極めたというわけでもありません。正直なところ、本日のシンポジウムについて考える中で、私は改めてこの「ニュー・ヒューマニズム」というコンセ

プトを再発見したのです。そして、長い道のりとなるであろうナールランダ大学の再建という目下の仕事に着手するにあたり、このコンセプトを貫き通したいと願っております。

ナールランダのような大学の建設過程は、一人の人間の考えだけから生まれるものではないということとは、だれもが同感されると思います。大勢の人々が協同した努力と意見交換があつてこそ、この壮大な大学の輪郭や形態、機構が具現化し、現実のものとなるのです。私は、協議というプロセスを非常に重視しています。そのために、どのような機会も逃さず、このプロジェクトに対する私の考えを試してみたり、他の識者の方々の考えを取り入れたりするのです。その意味で、ナールランダ大学復興に要する長い道のりの途上にあつて、私の考えをお伝えし、新たな考えに触れる本日の機会を頂戴し、うれしく思います。

ナールランダ大学復興プロジェクトについてお話しする前に、ちょうど昨晚、ラージギール（王舎城跡）、ナールランダ訪問から戻つて来たことをお伝えさせていた

だきます。靈鷲山の山頂に向かうロープウェイの中で、2千5百年も前に一人の人間が、彼の最高の教えである法華経を説くために、茨の灌木の生い茂る、見るからに岩だらけのこの場所を、どうやって登つて行つたのだろうかと思わずにはいられませんでした。それは感動的な体験であり、非常に謙虚な気持ちにさせられました。

この経験により、このインドの地で1997年、池田SGI会長が語られた次の一文を思い出しました。「私の生涯のテーマは、『一人の人間における偉大な人間革命は、やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする』であります⁽¹⁾。これは、池田会長が幾度となく、人類が新たな課題に挑戦していくために広げていかねばならないと訴えてこられたヒューマニズム（人間主義）の哲学の核心にある思想であります。

こうした（人間の）絆、つながりこそ、私ならびに大文学理事会がこれからナールランダ大学の建設という挑戦に立ち向かうなかで、私が心に留めていきたいと願う

ものです。理事長を務めるアマルティア・セン教授（ノーベル経済学賞受賞者）は、本年1月のインド科学会議で基調講演を行った際、ナーランダの復興について、最も困難だがやりがいのある仕事の一つである」と発言しています。教授いわく、「破壊から」8百年の歳月が過ぎた後で大学を再興することが、どれだけ大変な事とか、わかってきました」と。

このプロジェクトに3年以上前から取り組んでいる理事会のメンバーは、世界的な第一級の学者陣であり、彼らのおかげで、プロジェクトに国際的視野がもたらされるとともに、目的に向かう比類なき真剣さと真摯さが、みなぎることになったのです。

「知識を世界と分かち合う」伝統

ナーランダほどの歴史的重みをもった大学を再興するには、多方面の思索と行動が必要です。その一つが、大学そのものもつ特質と構造ですが、話をそちらに進める前に、古代ナーランダ大学の素晴らしい遺産を認識し、ナーランダ大学の歴史や、ナーランダをナー

ランダたらしめた要因を、十分理解する必要があると思います。

さらに、古代のナーランダの破壊から、同じ名前で新大学を建設するプロジェクトまでの8百年間には、教育機関としての大学の特質や形態は、著しい変化を遂げたという事実もあります。現在、大勢の学者、運営陣などが「大学それ自体、どこに向かっているのか?」「大学は、現代の形態のままで発展できるのか、それとも大学にも革新が必要か?」といった問いに取り組んでいます。私たちは岐路に立たされているのです。さらに、こうした変化を反映する一方、ナーランダ大学が学問・研究の真の中心地としての地位を得るためには、対応し克服しなければならぬ一連の課題があります。

「歴史」と「現実」という二つの並列する課題を、ナーランダ大学がどう解決するか、私どものプロジェクトが、どのように従来の古い型を破って独自の進路を切り開くチャンス握っているかを述べたいと思います。重ねて申し上げますが、これは現在進行中の事業

であり、思索が深まり、ナーランダ大学が発展する中で、時間をかけ経験を積んで、改善されていくものです。

歴史をひもとけばわかりますように、古代のナーランダ大学は、ほぼ8百年近くにわたって存続し、ちょうど名門オックスフォード大学やパリ大学が創立されたばかりのころに幕を閉じました。⁽²⁾ケンブリッジ大学は、まだ誕生していませんでした。ボローニャ大学の創立は、ナーランダ大学誕生の6百年後、カイロのアル・アズハル (Al-Azhar) 大学ができたのは、ナーランダ創立の5百年後でした。このように、ナーランダ大学は、私たちが知る中で群を抜いて古い、世界最古の大学だったのです。

ナーランダ大学が伝説的であるのは、歴史の古さだけではありません。8百年近くにわたり、組織的に学問を教授し、教育機関として機能し続けたという事実の重みです。さらに、各地から学生が集って来た、実に国際色豊かな大学だったのです。記録によれば、中国、チベット、モンゴル、韓・朝鮮半島、トルコなど各地からの留学生がいました。また近辺には、オーダンタ

ピュリ (Odantapuri) 大学、ヴィクラマシーラ (Vikramashila) 大学に代表される組織化された高等教育の伝統が広く



ナーランダ大学遺跡。14ヘクタールという広大な敷地に、多くの校舎、学寮、僧坊などが建っていた。池田SGI会長も1979年に訪問した

見られたのです。

ナーランダの記録によれば、ナーランダは単に学問・

教育の中心地であっただけではなく、要請に応じて、各地に学者や専門家を派遣し、討論を監督したり、拠点を設立したりして、より多くの人々に学問を広げ、啓蒙したのです。ナーランダの学問の一番の特色であり、私たちが決して見失ってはならないことは「知識を授け、広め、分かち合うこと。それがすべてである」という点です。セン教授は、先に引用したチェンナイでのスピーチの中で、玄奘三蔵のエピソードを紹介しています。ナーランダでの修学を終えた玄奘は、インドに留まるよう引きとめられた際、「自分だけが法を知って楽しもうとする者は、いまだ法を知らない人たちのことを忘れているのです」と述べ、正しき悟りを広めよとの仏の誠告に従って、中国に戻っていったというのです。ナーランダの最高の贈り物とは、狭い地理的制限や宗教の枠から知識を解放し、世界全体と知識を共有することを目指したことでした。

社会とともに変化してきた大学

大学が極めてまれな存在であったナーランダの時代とは対照的に、その後の8百年間に世界では大学が相次いで創立されました。現存し、学術界で重きをなしている屈指の大学は、この時期に誕生しました。大学のような新しいタイプの機関の設立は、学問の新分野の登場と同じほど重要な「社会的動きの一大出発点」⁽³⁾ともなりました。大学には、それまでにはなかった新しい社会的想像力や社会的経験を解き放つ可能性があり、実際、社会生活の多くの点に影響を与え、変化を引き起こしていったのです。その後、大学は、さまざまな時期に何度かの変遷を経て、現在のような形態に落ち着きました。

そうした節目をごく手短にあげれば、最初の決定的な変化は18世紀末に起こり、フランスとドイツで異なる方向に進んで、新しいタイプの大学を形成しました。フランス型は、職業訓練型ともいうべきものでした。他方は、ベルリン大学に代表される、教育と研究を結

合させたタイプの大学でした。フランス型は、教育を専門的職業とその後の雇用に結びつけるものであり、³経済的な援助者や生まれに恵まれた者だけが教育を受けることができる⁴という考えを否定しました。研究と教育を結合させたドイツ型は、大学がもはや既存の知識を伝達するだけではなく、知識を創出する存在になったことを示すものです。このタイプはアメリカでの大学創立にも影響を及ぼし、ジョンズ・ホプキンス大学やシカゴ大学が、最初の「研究型大学 (Research University)」として設立されることとなりました。それまでは、生産的な研究活動の大部分は、正規の大学以外のあるところで行われていたのです。第2次世界大戦後には、別の変化が起きました。すなわち「マス型大学 (Mass University)」の登場です。これは、エドワード・シルス (Edward Shils) の用語で、学生数2万名以上の規模のアメリカの大学を指しました。

19世紀から20世紀にかけて、現在まで続く、大学の別の変化が起きました。この変化により、学術教育が全般的に、宗教上の規制や宗教的権威による管理や

制限から解放されました。また、現在の大学教育のあり方に多大な影響を与えた革命的变化の一つに、男女両性に教育の門戸を開放したことに加え、あらゆる階級や共同体の人々に教育の機会を与えたことがあります。こうした変化によって、狭く、社会的に限定された大学とは対照的な、開かれた、宗教色のない大学が誕生しました。しかしながら、ここで忘れてはならないことは、大学の開放は、何の抵抗にもあわずにいと簡単に成し遂げられたのではないということです。と紆余曲折を経て、難航を重ね、達成されたのです。とはいえ、この長期にわたった苦闘の結果、大学は徐々に、初期のヨーロッパの諸大学に見られる⁵伝統的価値を墨守する旧来の⁶であることから脱皮し、保守の殻を破っていったのです。

知識の拡大は、さらなる変化をもたらしました。すなわち、科学と学問における新分野の登場です。それは時とともに増加の一途をたどっています。実際、20世紀までにそのような状況になっていたため、どの大学においても、「既存の学問分野 (今の大学のカリキュラ

ムとなっているもの）の範疇にすべての新分野を含め」なおかつ「専門能力をもった学者・科学者の世界である大学の特質を維持する」ということは難しくなったのです。

こうして、新たな専門分野の分科が進んだり、学問分野が増加したことによって、新しいタイプの大学が出現してきました。すなわち、法学、農学、教育学などに特化した専門大学です。これらは、哲学から医学まであらゆる学問への取り組みを網羅した集合体という本来の「大学」の概念から遠くかけ離れたものです。総合的な教育を提供する大学は主に、市民の育成に——願わくは地域社会・国・大陸のリーダーを育成することに焦点を合わせていました。それとは対照的に、新たに生まれた単科型の大学は、特化した限定的な分野を強みとし、そうした点が、各々の選択分野において、将来、経営者となる資質を備えた学生たちを育成するには理想的であるとされているわけです。

以来、残念なことに、大学が市場志向型の企業体のように見られる傾向が、どんどん強まっています。大

学の信頼度は今や、学生の就職市場への即戦力が決め手となるのです。大学を、学生を顧客としたサービス産業とする見方もあり、その結果、大学教員や知識人の地位は全般的に低下しました。今や大学教員はしばしばそうしたサービスの提供者と見られ、知的な取り組みについても、実用性や人気その他を基準に説明されるようになっていきます。

こうした状況から、大学教育の特質や形態全体が問い直されています。企業体としての大学は、変化の過程にあります。その方面において、大学関係ではこのところ、「知識の生産者」という言葉が盛んに言われています。教える時間は研究から離れている時間であり、無駄だと考える人さえいるほどです。学問の世界では、既存の知識の伝達や吟味よりも、新たな知識の生産に夢中なのです。

インドという文脈の中で考えたとき、こうした問題の多くは、また別の様相を帯びてきますが、ここでは詳細は省きます。ただ、ナールンダの破壊および同様の教育機関の終焉後、インドの大学事情が再び活性化

するのは、1857年に三大大学が創立されてからのことでした。（※同年9月5日のインド立法議会の法律により、マドラス大学、ムンバイ大学、コルカタ大学がロンドン大学をモデルに創立された）

（英語という）新しい言語を通してではありませんが、インドにおける近代大学との出会いは、西洋思想との出会いでもあり、新たな学問分野や学習・研究方法との出会いでした。社会的意義をもつ影響もありました。インド女性の解放について、大学は、他のどの機関よりも貢献してきたのです。社会に出るにあたり、女性にも仕事面で男性と対等の力をつけさせたり、他のどの教育機関よりも、親族以外の男女が自由に交流できるようにしました。また、異なるカーストや共同体出身の人々の間にも同様の自由な交流ができるようになりました。

7 分野の大学院大学として出発

新生ナールンダ大学は、こうした歴史の上に創立され、「インド政府初」の多くの点があります。第一に、

国際大学として創立されたのは2番目ですが、南アジア地域協力連合（SAARC）諸国を対象としたもう一つの国際大学よりも広域から学生が集うことになりました。二点目として、インドで大学が再興されるのは、これが初めてです。

新ナールンダ大学が古代の遺跡の場所に再建されるのかどうかを気にかけている方が大勢おられますが、これを明確にさせていただきますと、古代ナールンダ大学遺跡は世界遺産であり、そこから10キロほど離れたところが新ナールンダ大学のキャンパスになる予定です。このインド最高の名門近代大学は、大都市ではなく、多くの人が後進地域と考えるビハール州に建設されるわけです。私も理事会も、このことを難点であるとは考えておりません。なぜなら私たちは、キャンパスに世界レベルの施設を再興し、世界中の人々がそれぞれの問題を解決するためにナールンダに来てほしいと思っているからです。

しかし私たちは海国なき未知の海域におり、なすべきことは山ほどあります。このプロジェクトの実施に

は、ナーランダにつくるべき大学について私が提起してきた、より根本的な問題と同様に、当然、ロジスティクス（事業実行計画）も重要になるでしょう。私が自問し、完璧な答えを求めて奮闘しているのは、「ナーランダ流とは何か?」「ナーランダならではの特色をどう出すか?」ということです。

ご承知のように、大学建設とはレンガとセメントで建物を造ることではありません。ナーランダは何をしようとし、何を象徴しようとしているのか。そのことをはつきりと理解することが不可欠です。また、大学の周辺地域の住民への貢献や、古代ナーランダ大学を昔から支援してくれた村落への貢献も考えなくてはなりません。今回は、大学の側が近隣を支援するチャンスなのです。

新ナーランダ大学に関する問いの中には簡単に答えられるものもあります。私たちは、オープンで、非宗教的な、どのような人でも受け入れる大学を想定しています。ナーランダは、大学が本来あるべきかたち、すなわち自律した機関となるでしょう。教育と研究が

密接に連携し、それぞれが対等な地位をもつでしょう。

大学の特色となるべきものの一つに、初代ナーランダ大学の伝統を念頭に置きながら、最新の学問に対応した指導を行うということがあります。哲学、比較宗教学、文学というもとの知的関心に加えて、新ナーランダ大学に、エコロジーや環境、平和学、情報科学、開発学といった現代的な知的関心があるのはそのためです。ナーランダ大学は、まず7分野の大学院大学という小規模で開学し、将来的に学部レベルも導入する予定です。これらの分野は、思いつくまま選んだものではありません。現代の学問と従来型の学問の両方を熟考した結果であり、今後、分野を増やしていく予定です。私たちの現在の課題は、学生、教員、研究者が、学際的な環境の中で知識や学問を深めることができるような、独自の学術的特色を自ら築くことです。理事の一人であるデサイ卿（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス名誉教授）が本学のビジョン声明で次のように言っています。「学生・教員はともに、多様な分野における知識欲ならびに知識を吸収する能力で選ばなければならない

ばなりません。古代のナーランダがそうであつたように、最優秀の学者と研究者をそろえねばなりません。彼らに活気ある生活環境を用意しましょう。そうした環境が、新しい知識を創造する次の世代をはぐくむことでしょう」

「教育の絆」でアジアを結び、世界と交流

教育の質の高さに焦点を当てることは、本プロジェクトの核心であり、決して妥協してはならない点です。ナーランダは、新しい知識の創造と発信、そして、いにしへの貴重な智慧の復興・復活のために、最高峰の人材をそろえる予定です。そうすることで、アジアの学術的中心地となり、アジアの各地域を結び、アジアと世界を結ぶセンターとなるでしょう。

私たちは、アジアが台頭し、アジアの各国間のつながりがかつてないほど増えつつある時代に生きています。アジア諸国相互の結びつきは、多様な分野のさまざまな面に広がっています。これは、古代に始まったことが、現在に再生されたものです。かつて、この大

いなる結びつきは、知的、宗教的、文化的、物質的領域に広がっており、ナーランダは、その中心的役割を果たしていたことが知られています。インドとすべての近隣諸国とのこの重要な結びつきは、しばらく歴史の中で影を潜めていましたが、今、蘇りつつあるのです。ナーランダ大学は、かつてこのネットワークの中で占めた中心的位置に復帰したいと思っています。というのも、過去に私たちがアジアと呼んでいる地域の一つに結びつけていた思想があつたとしたなら、ナーランダがその中心であつたことを決して忘れてはならないからです。

古代のナーランダは、当時のアジアの知識と言えるものの大部分を集成し、知的世界の先端でした。インドを世界の他地域と結ぶ他のさまざまな絆とともに、ナーランダの「教育の絆」は、他地域との橋を渡し、相互理解を醸成してきました。そうした地域と私たちは、再び有意義なパートナーシップを結んでいるのです。こうした相互依存関係は、あらゆるレベルで認識される必要がありますが、ナーランダ大学は、そのう

ちの知的レベルでの取り組みの先頭を歩むものです。というのも、「アジアの再興」は、その統合を推進するために、地域の結びつきについての〈新しい発想〉を必要とし、国際関係・エコロジー・環境・コンピュータ・ITなどの分野がもたらす〈新しいタイプの知識〉を必要としているからです。

再び、デサイ卿の言葉を引かせていただきます。「第三の千年（ミレニアム）の大学は、多方面に通じた展望をもち、世界各地の思想や慣行の動向にオープンでなければなりません。公正で希望ある平和と繁栄を万人が享受する世界に生きられるようになるには、まだまだ遠い道のりですが、世界が求める、そのニーズに、第三の千年の大学は応えていかねばならないのです」

こうした言葉は、ヒューマニズムに関する池田会長の著作とも響きあうものです。ここでは教育の重要性について、教育は社会変革の道であり、さまざまな束縛から民衆を解放し、民衆同士が出会い語り合いながら、よりよい社会を築いていけるようにする方法であると述べられています。

私は、今後ともこうした理念を決して忘れず、大学を建設するという厳しい現実にはチャレンジしてまいります。

原注

- (1) ラジブ・ガンジー現代問題研究所での講演『「ニュー・ヒューマニズム」の世紀へ』（1997年10月）。初出は、著作『人間革命』の序文（はじめに）。
- (2) 存続期間は、およそ紀元425年から1205年まで（Hasmukhlal Dhirajlal Sankalala氏の説）、あるいは1199年、1193年までの説もある。
- (3) Andre Béteille, *Universities at the Crossroads*, Oxford University Press, New Delhi, 2010
- (4) 前掲書。アンドレ・ベティユがエドワード・シルスの用語に基づいて叙述。

(Gopa Saharwal / ナーランダ大学副総長)
(訳・加藤由美子)